

シリアにおけるイスラームとキリスト教の境界域の研究

研究代表者 北海道大学大学院文学研究科 教授 太田敬子

I. 研究の目的

本研究の目的は、イスラームとキリスト教の境界をなしていた地域の特徴を、自然環境や産業構造、社会制度等の面から再検討することであった。研究対象としたのは、シリア地方（地中海東岸部一帯。アラビア語のシャーム al-Sham）とその隣接地域である。シリアは7世紀前半に始まるアラブ・ムスリムの征服から13世紀末に十字軍勢力が駆逐されるまで、ムスリムとキリスト教徒が軍事・政治的にも文化的にも非常に深く関わりを持ち、軍事抗争だけでなく接触と交流を繰り返していた地域といえる。中でも、ビザンツ境界域ⁱにおいては、特別な行政システム、戦争や敵との交渉・共存を前提とした様々な社会制度が見られたことは今までの研究によって明らかにされているⁱⁱ。また、十字軍時代この地域にはアンティオキア公国が成立し、アルメニア人も含めたキリスト教勢力とイスラーム勢力の係争地かつ交渉の場であった。一方、聖地エルサレムの存在するシリア南部（現在のレバノン南部とイスラエル＝パレスティナ、ヨルダンの一部を含む）は、ムスリムの征服後も中東キリスト教世界の中心であり続けたが、十字軍時代になると政治的にもキリスト教徒が覇権を広げ、エルサレム王国を中心とした十字軍勢力とムスリム諸勢力の支配領域が入り交じったモザイク状の様相をなした。そこもまた、イスラームとキリスト教の異なった形態をなす境界域となり、税収の折半や、捕虜交換・政治交渉等も含めて並存と相互関係の維持のための諸制度が見られたことが近年の研究によって明らかにされつつあるⁱⁱⁱ。特にレバノンにおいては、その後も宗教的なモザイク状況が根強く残り、第2次世界大戦中の独立以降もそれが維持されている。

これらのシリアにおける境界域の研究は、異なった研究課題として推進され、有機的に結びつけられては来なかった。また、現代中東社会における宗教・宗派問題と関連づけて捉えられることも余りなかった。本研究では、ムスリムが圧倒的多数を占める中東イスラーム世界において、これらの地域が現在に至るまで、規模こそは縮小したものの、中東におけるキリスト教徒の中心拠点となっていることに着目した。

以上を踏まえて研究目的を絞り込み、具体的研究テーマを以下のように設定した。

- (1) イスラーム以前のビザンツ時代から十字軍時代に至る北シリアとビザンツ境界域社会の状況を、文献学的に研究し、さらに現地調査によって実際の城塞や境界域都市の立地状況、キリスト教会や修道院及びその遺構の分布状況、キリスト教徒共同体の分布状況、産業・人口構成等を把握し、文献資料と比較検討する。
- (2) 十字軍時代のシリア南部の勢力構造を文献学的に研究した上で、十字軍要塞の立地状況や過去及び現在のキリスト教徒勢力圏の状況に関する現地調査を行い、比較検討を行う。

- (3) 両地域の比較検討から、イスラームとキリスト教の境界域が、どのような地理的、社会的、経済的環境において形成・維持されていたのかを検証する。

II. 研究プロジェクト実施状況

研究推進の方法としては、まず現地調査の基盤となる文献の収集と研究から着手した。文献資料に関しては、研究代表者は既に境界域に関する研究を従来から進めているので、かなりの蓄積があった。ただし、近年進歩が目覚ましいマムルーク朝関係の文献に関しては、写本のマイクロフィルムや新しい校訂本も含めて収集が必要であると思われたため、当初の研究計画ではエジプトに海外出張し、カイロ国際ブックフェア等でそれらを入手する予定であったが、幸いにもその殆どを日本から購入、或いは海外の図書館から貸借・コピー等の形で参照することができた。入手できなかったアラビア語文献も海外調査の際にダマスクス（シリア共和国）で購入することができた。それらを順次検討していたが、近年十字軍関係の研究書が予想以上に多く出版されていることが分かった。中には概説書的なものも多く、収集と整理に予想以上に時間と経費がかかった。

研究の実施計画の大きな障害となり、その変更を余儀なくしたのは、2006年7月半ばから約2ヶ月半に亘って行われたイスラエル軍によるレバノン侵攻であった。本研究助成に申請した際には予想できなかった軍事行動であり、現に研究代表者は2006年3月に約2週間に亘って南部を含むレバノン各地で調査を行っていた。当初短期間で終結すると思われた侵攻は空爆だけでなく地上戦にまで拡大し、その被害もレバノン全土に拡大、イスラエル軍撤退後もレバノンの混乱した状況はなかなか修復されなかったため、レバノンにおける現地調査は困難になった。当初の研究計画では2007年の前半期にレバノンにおける調査を行う予定であった。計画では、特に今まで訪れたことのないレバノン南部山岳地帯の要塞と都市、その周辺共同体の調査を行う予定であったが、それが不可能になった。そこで調査の重心をビザンツ境界域に置くことに決め、2007年の11月から12月にかけて約1ヶ月間、旧ビザンツ境界域に相当するトルコ共和国東南部とシリア共和国北部において現地調査を行った。

トルコ共和国においては、(1) マルディンとその周辺地域、(2) アダナとその周辺地域、(3) アンタキアとその周辺地域の3カ所で調査を行った。(1)は現在においてもトルコのキリスト教文化の中心地と見なされている地域で、主に教会・修道院（及びそれらの遺構）を訪問し、その立地状況を観察すると共に、周辺のキリスト教徒村落との関係、スリヤーンと呼ばれるキリスト教徒の人口動態等を聞き取り調査した。(2)はビザンツ領域に対するムスリムのジハードの拠点と定められていた地域であった。現在はアダナが中心都市であるが、歴史的にはタルスースが最大の軍事拠点であった。この地域の都市（及びその遺構）の立地条件や周辺の産業、特に農業生産の状況を調査すると共に、山岳部に点在する要塞を可能な限り訪れ、境界域都市との関係を検証した。(3)は歴史上エルサレムに次ぐシリアにおけるキリスト教文化の一大中心地として有名なところで、キリスト教関連の史跡はローマ時代

に遡るものが多い。本調査では、特にビザンツ時代から初期イスラーム時代、十字軍時代に建設または改修された周辺要塞の立地状況と都市との関係性に調査の焦点を絞った。

シリア共和国においては、北シリアの中心都市アレppoを拠点として、(1) イドリブ地方のビザンツ時代の都市遺跡、教会・修道院の遺構と共同体の調査と、(2) ラタキア周辺部から中部シリアにかけての十字軍要塞の調査を行い、その後首都ダマスクスにおいて、文献収集を行った。大統領選が挙行できない等の問題はあるにせよレバノン情勢もかなり回復してきたと判断し、最後にレバノンにおいて3日間の調査を敢行した。軍事施設等に抵触しない山岳部(南部を除く)のマロン派キリスト教会・修道院、及びその周辺部に広がるキリスト教徒共同体を見聞した。

以上が、本プロジェクトの実施状況の概要である。レバノン情勢を見極めるために、現地調査を実施するのが大幅に遅れたが、文献研究で蓄積した情報を実地調査で確認・検証するという方法で、イスラームとキリスト教の境界をなしている地域の特徴を、自然環境や産業構造・社会制度等の面から再検討するという本研究の目的は一応達成し、境界域の歴史研究をさらに推進する重要な基盤を固めることができたと考える。

Ⅲ. トルコ共和国における調査

上記のように、トルコ共和国においては3箇所において現地調査を行った。以下ではそれらについて詳解する。研究代表者はトルコ語に堪能ではなく、現在トルコ東部ではトルコ語化政策によって、アラブ系住民でもアラビア語が通じ難いという状況を鑑み、お茶の水大学大学院人間文化創成科学研究科研究員の斎藤久美子氏に、アンタキア以外のトルコにおける調査に協力して頂いた。そのため、当初計上していた人件費を斎藤氏の旅費に当てた。

(1) マルディンとその周辺部における教会・修道院の調査(2007年11月28日~12月1日)

マルディンを拠点として、マルディン東部の町のみディヤト、マルディン南東に位置するシリア国境の町ヌサイビン及びそれらの近郊に位置する教会・修道院(またはそれらの遺構)、キリスト教徒の共同体の立地状況を見聞し、彼等の歴史、現在の状況や人口動態について聞き取り調査を行った。マルディンの東部一帯は、歴史的にはトゥール・アブディーン Tur 'Abdin と呼ばれ、単性論派シリア教会(シリア正教会)^{iv}の一大中心地であった。この宗派の人々を一般にスリヤーンと称するが、広義にはシリア語で典礼を行うキリスト教会の信徒を総体的にこう呼ぶこともある。トゥール・アブディーンは、多数のキリスト教関係の史跡が見られるだけでなく、現在に至るまでもキリスト教徒人口の集中している地域として知られている。同地域の調査の目的は、教会・修道院とキリスト教徒共同体との関わり、キリスト教徒共同体の変遷を検証することであり、キリスト教都市として有名なみディヤトを中心に20箇所の教会と7箇所の修道院を訪問し、可能な場合は関係者から聞き取り調査を行った。それらの殆どはシリア正教会に属し、建造年はビザンツ時代から初期イスラーム時代に

起源を發するものが多いが、近代になってから建造された教会もいくつかあった。トゥール・アブディーン地方一帯のキリスト教徒人口が激減したのは、オスマン朝末期からトルコ共和国独立戦争期であり、その後もクルド人の進出等に押されて人口減少は続いている。スリヤーンの村として有名なイチュキョイ Içköy の Mor Efrem 教会における聞き取り調査では、クルド人の反政府運動の影響で治安が悪化したため、1990年代には60世帯あったスリヤーンの人口は現在、40世帯200人まで減少しているという。そのような状況にもかかわらず、修復・再建中の教会が5箇所、2年前に再建が終了した教会が1箇所見られた。それらは、1つの例外を除いて、かつてはキリスト教徒の町や村に存在していたが、キリスト教徒の人口減少（移住や殺害による）によって荒廃し、その後ムスリムがその地に住み着いた、という歴史を共有している。移住したかつての住民が資金を提供して故郷の教会の再興を計っており、彼等にとって代わったムスリム住民が農閑期の仕事として再建工事の労働力を提供しているという興味深い構図が見られた。また、荒廃したスリヤーンの村に政府が積極的に再入植政策を推進し、土地や農耕機具、住宅を提供している事例も見られた（Mor Yuhanon 教会近隣の村）。おそらくはクルド人対策であると考えられるが、この場合スリヤーンの新入植者は外来者であり、かつての共同体と結びついていた教会や修道院には殆ど関心がなく、それらは荒廃したまま放置されていた。当然のことながら、キリスト教徒住民が消滅したため荒廃したままで、通常は閉門されて管理者が定期的に訪れるだけの教会や修道院も見られた。以上のことから、ハフ Hah やバキスヤン Bakisyan 等の全住民がスリヤーンの村の事例を除いて、現在の教会や修道院の立地は必ずしもキリスト教徒共同体や彼等の人口分布と直接的に結びついていないことが明らかになった。また複雑な民族・宗教構造を有する同地方の住民に対する中央政府の移住政策は、歴史上、境界域の安定化政策としてビザンツ帝国もムスリム政権も常套的に採用していた。それが時代を超えて現行政府によっても踏襲されていることは注目すべきであろう。

教会や修道院の立地を観察すると、都市内部の場合を除いて、周囲には非常に豊かな耕作地・果樹園が広がり、羊等の牧畜も大規模に行われている状況が一般的であった。その点でエジプト等に見られる砂漠の修道院の状況とは異なっていた。Mor Shimuni 教会における聞き取り調査によると、トルコ政府は教会の不動産所有を原則認めない方針で没収しているというが、修道院の周辺にはその所有する農園がかなり大規模に存在していた。

教会・修道院・キリスト教徒共同体の有機的な結びつきや経済状況を示す興味深い事例として、同じく Mor Shimuni 教会における聞き取り調査によると、ミディヤト市内にある同教会と市街地から数キロ離れたところに位置する Mor Aborohom-Hobel 修道院とは、共同して農村部のスリヤーン住民の教育支援を行っており、現在25名の男子が同修道院に寄宿して高等学校に通い、昼食は同教会で提供されているという。これらは無料で提供されており、主に信徒の寄進によって賄われているという。教会・修道院・共同体が結びついた相互扶助体制が、キリスト教徒共同体が減少した現在でも機能していることが分かった。

トゥール・アブディーンにおける調査によって、かつてのビザンツ境界域は、その最北端に位置するところでも、イスラームの「辺境」という言葉が連想させる未開・非文化とはほど遠い、非常に豊かな農耕・牧畜地帯であったことが分かった。都市部だけでなく各村に満遍なく分布している教会や修道院は、同地方におけるキリスト教文化の基盤の強固さを示していた。周囲の経済力に支えられたに支えられたキリスト教文化が、近年に至るまで長きに亘って繁栄してきたことも確認された。その結果、中央との関係や異文化との接触に注目するだけでなく、産業・経済・地理的環境の面からも、境界域となった地域を中心に据えて研究するという方向性を確認できた。

(2) アダナとその近郊における都市及び要塞の調査 (2007年12月2日～12月3日)

トルコ南東部最大の都市アダナを拠点とした調査の目的は、ビザンツ境界域の軍営都市の立地状況を見聞し、同地方の北西部に連なるタウロス山脈に点在した防衛要塞の遺構を可能な限り辿ることにあつた。現在のアダナ県からメルシン県南部に亘る地域が調査の対象地域で、ローマ・ビザンツ時代のキリキア第1州・第2州、ムスリムが支配権を握った後は、シリアのスグールと称された地域であり、ビザンツ領域侵攻のためのムスリム軍が駐屯する都市が、8世紀末から9世紀前半にかけて次々と設けられた。その最大のものがタルスースである。また、イスラームの創設以前、ビザンツ帝国とサーサーン朝の抗争期から同地方には多くの防衛要塞が建設されていたと記録され、所有者は変転しながらも十字軍時代に至るまでタウロス山脈の山道を監視し、敵の侵入を阻止する防衛ラインを形成していた。それについてはアラビア語・ギリシア語・シリア語・アルメニア語等の多くの史料から確認されている。

シリアのスグール歴史において特筆すべき点は、ムスリム軍のシリア征服に際してビザンツ軍が撤退するに際して、アナトリア半島内部への敵の侵攻を阻止するために、無人化政策が敢行されたことである。住民が軍と共に撤退し、人為的に荒廃させられた同地方におけるムスリムの支配権は不安定な状態が続いた。750年にアッバース朝カリフ政権の成立以後、本格的なスグール再開発事業が計画され、特に第5代カリフ、ハールーン・アッラシード(786-809)時代に、マッシーサ(現ジャイハーン)、アダナ、アナザルバス(アラビア語名アイン・ザルバ)、タルスース、ティヤナ(現カマルヒサル)等の旧ビザンツ都市がムスリムの境界域都市として再建され、兵士の入植が行われた。これらの史実をふまえて、上述の諸都市を実地検分した。

その結果、これらの諸都市が広大な平野部の農耕地帯の真ん中に位置し、河川に面しており、いずれも軍事拠点というよりはむしろ周囲の農業生産物を集積する経済の中心というのに相応しい立地条件にあることが確認された。現在アダナ県の平野部では、小麦に加えて年2回のトウモロコシの収穫が可能であり、夏は高温多湿に苦しむものの冬季は極めて温暖で街路樹としてオレンジの木が植えられているほど果樹が豊富である。アダナからタルスース

にかけての高速道路沿いには、トウモロコシの貯蔵用の巨大なタンクが林立している。タウロス山脈を越えたメルシン県のティヤナについては、ムスリム軍とビザンツ軍が激しい攻防を繰り広げ、結局アッバース朝政府は軍営都市化を放棄したという経緯が文献資料から分かっている。アダナ県よりもかなり寒冷の地ではあるが、ティヤナも遮るものもない小麦の農耕地帯の真ん中に位置していた。ムスリムによるシリアのスグール再建事業に関して、ビザンツ領域に対するジハードの拠点の建設という軍事的性格が文献資料においては強調されているが、経済的側面、特に農業生産振興と税収の拡大という観点から捉え直す必要があるという新たな研究の方向性を見出すことができた。

経済拠点という特徴を色濃く持つ平野部の都市に比較して、タウロス山脈の山岳要塞は接近することさえ困難と思われる要害に在り、遠くからそれらの位置を確認できたに過ぎない。タウロス山脈の山道（キリキア門）の入り口を防衛する砦であったというギュレック Güleç の要塞等はかろうじて遠くから撮影することができたが、ルルア Lu' lu' a の砦は結局確認することはできなかった。山岳砦には狼煙等の設備が整い、数時間でタルスースに敵の侵入を伝えたと記録されている。上記の軍営都市の環境から考えると、軍営都市自体は余り防衛能力が高くなかったように思われる。そこはあくまで軍隊の維持と攻撃準備のための基地であり、山道の防衛がシリアのスグール防衛の要をなしていたことが分かった。このほかアダナ北西部には、11世紀から十字軍時代にかけての建造物である山上要塞が点在している。本調査では、コザン（シース）要塞とユナン・カレを訪れた。



タウロス山脈中の要塞

(3) アンタキアとその周辺部の遺跡と要塞調査 (2007年12月5日)

アンタキアからは単独行動となった。本研究課題に関連する同地方における調査対象は、アンタキア近郊のアンタキア要塞とバクラス Bakras 要塞であった。アンタキア要塞は、セレウコス・ニカトル (在位前 312-281) によって新都としてアンティオキア (現アンタキア) が前 300 年に建設された際に、その防衛のために東方の山上に建設されたもので、アマノス山脈の山道 (シリア門またはバクラス門といわれた) からの侵入軍を防ぐ役割を担った。同要塞はローマ・ビザンツ帝国、カリフ政権、十字軍のアンティオキア公国へと所有者は変転したものの、その役割は変わらなかったが、現存する建物多くは初期イスラーム時代から十字軍時代のものであるということが確認された。バクラス要塞は、十字軍時代にアンティオキア公国初代君主のボヘモンドが建設した要塞で、アンティオキア公国滅亡後は、マムルーク朝の支配下に置かれたがその後荒廃した。両要塞はかなり大規模な山上要塞で、典型的なシリアの十字軍要塞の構造を呈していることが確認され、それはコザン・カレやユナン・カレと共通するところが多いということが分かった。十字軍がシリア地方に、それまでの山岳要塞よりも大規模な新しい要塞建築様式とそれを建設する技術を発展させる契機となったという説に対して、11 世紀にビザンツ帝国が建設したとされるユナン・カレをどう位置づけるかは今後の課題となろう。

IV. シリア北部における都市・城塞遺跡の調査

(1) イドリブ地方における都市遺跡とオリーブ産業に関する調査 (2007年12月8日-12月9日、12月11日)

同地方に数多く点在するビザンツ時代の教会・修道院の遺跡と都市遺跡を訪問し、キリスト教徒共同体と教会施設との関連性を辿ると共に、同地方の繁栄を支えたオリーブ産業の遺構を調査した。その目的は、北シリアの経済構造とキリスト教の関連性を検討し、ムスリム支配の拡大とイスラーム化の進行の中でそれがどのように変化していたかという問題の手がかりを得るためであった。イドリブはアレppoの南西、車で約1時間のところに位置し、現在イドリブ県の中心都市である。同地方はローマ時代からオリーブ栽培とオリーブオイル生産が盛んであった。オリーブ栽培は 250 年頃の地震でいったん荒廃したが、350 年頃から地方共同体が再生し、6 世紀になると都市から人口が移動してオリーブ産業 (栽培や油の圧搾業) に従事し、繁栄期を迎えたといわれている。現在でもシリア共和国における最大のオリーブとオリーブオイルの生産地であり、16,000,000 本のオリーブの木が栽培されている。12月8日は、イドリブ県南部のバーラ al-Barah、シルジッラー Sirjilla 等、計8箇所のビザンツ時代の都市遺構を調査した。バーラとシルジッラーは規模が大きく発掘調査も進んでいた。前者は5-6世紀頃に建設された町で、イスラーム時代以降も繁栄が跡づけられ、十字軍時代も続いたが、1258年の地震によって大方が倒壊し、建物の半分が地下に埋まったという。

現在フランスの考古隊によって発掘調査が進められているが、多くの建物が半分地下に埋まっていた。5つの教会跡が見られ、オリーブオイルの圧搾工場跡も確認された。地下には300mにも及ぶ水路があり、個人の邸宅も2階建てで、屋根はセラミック、使用木材はベイルートから取り寄せられたという。当時の町の繁栄が遺跡からも明確に分かった。後者もほぼ同時代の創建と見られるが、旧市の上に新市が建設されるという2層構造を呈していた。教会も2層をなしており、初期イスラーム時代（おそらくウマイヤ朝時代）に教会に隣接して集会モスクが建てられた。モスクの規模は小さいため、おそらく教会の一部がモスクに転用されたものと思われる。同市にもオリーブ圧搾工場跡が複数確認されていた。他の遺跡の発掘調査はまだ全く進んでいないため、オリーブ圧搾工場跡の確認はできなかったが、教会もしくは修道院と思われる建物を擁してオリーブ農園や果樹園、小麦等の耕作地の中に点在していた。

12月9日はイドリブ県北部からトルコとの国境に位置するハーリムの町に至る地域を訪問した。この地域には、さらに古いローマ時代の墳墓や1〜2世紀頃に建設されたローマの街道の遺構^{vi}が見られた。シリアに向かう街道の入り口として知られたハワー門 Bab al-Hawa から始めて、9箇所のローマからビザンツ時代の都市遺跡を訪れたが、大方の遺跡はまだ発掘調査が着手されていなかった。中にはムスリムが遺跡に居住し、村を形成しているところも見られた。山勝ちの地形のために都市遺跡の大方は山の上や中腹の高所にあり、教会や修道院とそれに付随した住居群の跡で構成されていた。中でもダーヒス Dahis の遺跡はこの辺り一帯のオリーブの集積地であり、24のオリーブ圧搾工場があることが確認されている。最も有名な教会遺跡はカルブ・ローゼ Qalb al-Luzah であるが、現在はムスリムの村の中にあり、旧来の町の遺構は失われていた。最後に十字軍時代にはアレppoのムスリム政権とアンティオキア公国の境界の要塞として重要な位置づけにあり、現在もシリアとトルコの国境にあるハーリムの町とその城塞^{vii}を検分した。



バーラの遺跡のオリーブ圧搾工場の一部

北シリアのイドリブ周辺地域は、ローマ時代からオリーブ栽培とオリーブオイル生産が発展していったことが文献資料においても確認されるが、そのオリーブ産業の繁栄を基盤として都市が建設され、地方共同体の発展が顕著に見られるようになったのは、ビザンツ帝国の時代になってからであることが今回の調査では確認できた。また、教会、事例としては少ないが修道院が、町や村の核として建設され、オリーブ産業の繁栄に加えてキリスト教の普及が地方共同体の発展に深く関わっていることが遺跡の実地検分によって明確となった。イスラーム時代になってそれがどのように変化したのかという問題と、現在のイドリブ近郊のキリスト教徒共同体の状況に関して、12月11日に、イドリブ博物館長アブー・ハンナー Abu Hanna 氏と夫人、ビザンツ時代の考古学を専攻している研究員シャーキル Shakir al-Shabib 氏、さらにイドリブ教会の司祭アブー・イブラヒム Abu Ibrahim 氏と面談した。館長夫妻と司祭によると、1～2世代前までイドリブ市内にはまだ100家族のキリスト教徒が居住していたが、現在では殆どが移住してしまっているという。館長夫妻もキリスト教徒であるが、近親の多くが外国も含めた他の地に居を移していると聞いた。一方、司祭の話では、キリスト教徒人口の移出にもかかわらず、イドリブ県内にはまだ5つほど住民が全てキリスト教徒である村が存在しているという。これらのことから、近代に至るまで農村部を中心としてかなりの数のキリスト教徒人口が存在し、彼等の共同体が存続していた可能性は高く、そのことを考慮して北シリアの歴史を再検討する必要があることが分かった。

イスラーム時代以降の変化に関して、通説ではイドリブ周辺のビザンツ都市はムスリムの進出以前に既に荒廃していたと見なされ、大都市への人口回帰と地震・交易ルートの変更などがその原因とされている。シャーキル氏もその説を採用していた。しかしながら、イドリブのオリーブ産業が現在に至るまで連綿と続いていることに関して、それがイスラーム以降どの時期に復興されたということについては解答が出されていない。文献研究と今回の調査を踏まえた上で、13世紀頃までは農村部におけるキリスト教徒社会の状況に余り大きな変化がなかったのではないかという新たな考えを研究代表者は得た。また、都市遺跡の中には、ローマ・ビザンツ時代のコンプレックスとイスラーム時代のコンプレックスが併存しているものがあり、それは前者が巨大な切石で建設されているのに対して、後者が小石を積み重ねる建設方法によることで区別されることは、既に考古学者等によって指摘されているが、小石のコンプレックスがイスラーム時代のどの時期から建設され始めたのかという点については問題が残っている。イドリブの遺跡と十字軍要塞の調査を総合すると、小石のコンプレックスはかなり後の時代（アイユブ朝からマムルーク朝時代、12～14世紀）に付加された可能性も否定できないという認識を持った。その間の空白期をどのように捉え直すかが、今後重要な課題となるだろうという見解を得た。以上のように、この調査によって北シリア社会の研究、ひいては境界域全体の研究に関して様々な新しい視点を得ることができた。

(2) シリア沿岸部の十字軍要塞の調査 (2007年12月10日と12月15日)

12月10日にはラタキア経由で、サラディンの要塞 Qal' at Salah al-Din とムハーリバ要塞 Qal' at al-Muhalibah の調査を行った。生憎の豪雨でそれ以上の調査は断念せざるを得ず、12月15日にマルカブ要塞 Qal' at al-Marqab とクラク・ド・シュバリエ Qal' at al-Husn を訪問した。これらの要塞はいずれもよく知られており、ムハーリバ要塞以外は調査・研究が進んでおり、既に観光地化している。今回これらを調査の対象とした理由は、既に調査したビザンツ境界域の要塞、ハーリムの十字軍要塞、さらにはイドリブ地方のビザンツ都市遺構と比較検討するためであった。サラディンの要塞は、ビザンツ時代、十字軍時代、アイユーブ朝時代の3つのコンプレックスから構成され、後者に比較して前2者は比較的大きな切石で建造されている。ユナン・カレ、アンタキア要塞、ハーリム要塞との類似性が高いことが確認された(要塞の構造や非戦闘員の住居跡と見なされる地区の存在等)。但し、貯水庫等の水利システムは大規模で圧倒的に優れていた。注目されるのは、ビザンツ時代のコンプレックスに大規模なオリーブ压榨場の跡が見られ、おそらくワインも製造されていたと考えられる点である。シリア北部におけるオリーブ産業の発達が生岳要塞にも波及していたことは、軍事要塞の社会的役割がもっと多角的に研究されるべきことを示唆している^{viii}。

ムハーリバ要塞は、2001年から発掘と修復が始められたばかりで、現地を訪問した後で、現在調査研究を進めておられるラタキア博物館長ハイダル Jamil Haydar 氏のレクチャーを受け、情報を収集した。アレppoを支配したハムダーン朝(905-1004)が建設し、十字軍からアイユーブ朝に受け継がれた要塞で積み石の様相もサラディンの要塞と同様に2つのタイプが確認された。残念ながら、豪雨に見舞われ時間をかけて検分することができなかった。マルカブ要塞は修復中であり、クラク・ド・シュバリエは修復され過ぎていて、あまり成果を得ることができなかったが、他の地域の調査と比較検討する上で、シリア沿岸部の十字軍要塞の調査の意義は大きかった。

V. レバノン山岳部のキリスト教会及びマロン派共同体に関する調査

レバノンでの調査は様々な制限が想定されたが、現地の協力者と相談の上、レバノン南部の十字軍遺跡の調査は難しいが、マロン派キリスト教会・修道院及びマロン派キリスト教徒^{ix}の町を訪問することは問題ないと判断した。調査の対象は、(1)デイル・カマル Dayr al-Qamar とバイト・アッデーニ Bayt al-Din 地区、(2)デイル・カーディーシャー渓谷 Wadi Dayr Qadisha とタンヌーリーン Tannurin、(3) ジャジーニ Jazin の3箇所を絞った。

(1) デイル・カマルとバイト・アッデーニ地区の調査 (2007年12月19日)

同地区はベイルートの南東部の山岳地帯に位置し、そこに至る山岳地帯は主にマロン派キリスト教徒とドゥルーズ派^xの居住区で、スンナ派及びシーア派の穆斯林は居住していなかった。デイル・カマルの現在の住民はドゥルーズ派がマジョリティで、キリスト教徒の多くは移住したが、4つの教会が存在し、最大の教会の基礎は1288年まで遡る。バイト・アッデ

ーン地区一帯のマロン派人口は約 20%で、現在はドゥルーズ派がマジョリティを占めていることが確認された。

(2) デイル・カーディーシャー渓谷とタンヌーリーンにおける調査 (2007 年 12 月 20 日)

デイル・カーディーシャーからバッシュアリー-Basharri にかけての地域は、レバノン北東部の山岳地帯に位置し、ビブロス北方の町バトゥルーン al-Batrun から内陸部に入って約 1 時間半のところに位置している。付近にはレバノン杉保存地区もある。渓谷から山岳地帯にかけて、近寄り難い峻険な山麓に古い教会や修道院の遺構が点在しているだけでなく、ディーマン al-Diman にはマロン派の総主教座が存在している。また、新たに建設・修復された教会も多く見られ、現在でもマロン派キリスト教徒の重要な勢力拠点であることが確認された。その南方に位置するタンヌーリーン近郊にも古いマロン派教会の遺跡が点在し、市内には 2 つの教会の存在していた。同市から沿岸部のビブロスに至る街道沿いにも、多くの教会が見られ、マロン派の共同体の存在が確認された。

(3) ジャジーン地区の調査 (2007 年 12 月 21 日)

ジャジーンはサイダー (シドン) から内陸部に入って 1 時間程の山岳部に存在している。そこに至るまでの街道沿いの町や村の大方はマロン派のものであるが、ムスリムの町も若干あることがモスクの存在から確認された。ルーム Rum のようにキリスト教徒とムスリム住民が混在し、2 つの教会と 1 つのモスクが見られるところもあった。ジャジーンは最古のマロン派修道士学校の存在している町で、人口 4000 名は全てマロン派であり、市街地と周辺部には多くの教会の存在が確認された。これらの教会の建築・修復費はヴァチカンからの補助で賄われているという情報は興味深いものであった。また、ジャジーンの町を取り囲んでいる山々の頂上にはいくつもの大きな十字架が立てられていることを確認したが、そのはっきりした理由は知ることができなかった。町の人口は少ないが、中心街の商店や家屋の状況から判断して、裕福な町であることが分かった。

以上の 3 箇所のマロン派地域を訪問したが、現在でもキリスト教徒イスラームの混在する文化的境界域であるレバノンの調査、特に南部レバノン内陸部の調査は、政治・社会状況が安定した後に是非敢行したいと考えている。

VI. 研究成果と今後の課題

研究の成果としては、まずアジア研究助成を得たことにより、「イスラームとキリスト教の境界域」をテーマとして幅広く文献収集ができたことが挙げられる。自分自身の研究のための文献学的基礎ができ、またそれをデータベース化して活用した。加えて、それらの文献を順に検討しながら大学院の講義 (歴史文化学特殊講義) を「境界域」をテーマとして行ったが、中東史を専門としない文化人類学の学生にも非常に歓迎され、また歴史学とは異なった彼等の視点を聞き、参考にすることもできた。

最も大きな成果は、やはり旧ビザンツ境界域をかなり綿密に調査したことから得られた。

まず、文献資料においてビザンツ境界域として定義されている地域は、確かに峻険な山岳地帯を擁し、ムスリム領域とキリスト教徒領域の間を隔てるような地理的特徴も含んでいるが、視野を広げてみるとその中には非常に生産力の高い農耕・牧畜地帯が含まれていることが分かった。確かに文献資料にも、ビザンツ境界域の農業生産や牧畜の状況の記述、農地開発や産業振興策についての記述はあるが、あくまでも軍隊の維持や戦闘の継続のための手段として記述され、また歴史研究においてもそのように解釈されてきた。しかしながら、今回の現地調査の結果、ビザンツ境界域の生産力のレベルは遙かにそれを凌駕するものであった可能性が極めて高いという認識を得た。このことは今後の境界域研究に新たな方向性を打ち出す大きな成果といえる。また、ビザンツ境界域におけるキリスト教会とキリスト教徒共同体の役割について、研究代表者は従来からその重要性を認識し、文献研究を通してそれを実証することを試みていたが、資料的な制限もあり、なかなか実証は難しかった。今回の現地調査によって、近代に至るまでキリスト教徒社会の伝統がとぎれてはいなかったことを検証し、研究の方向性の正しさを確信することができた。今後はそれを実証レベルにまで高めていきたいと考えている。

次に1年間の研究の反省点としては、まず、レバノン情勢の変化によって当初研究計画の変更を余儀なくされたこと、レバノン情勢の好転を待機していたために現地調査の時期が遅くなったことが挙げられる。特に農耕地は季節によって状況が大きく変化するため、調査が冬場にずれ込んだことは大いに反省している。また、地中海沿岸部は冬が雨期に当たるため、ラタキア近郊の調査において豪雨のために調査が妨げられただけでなく、イドリブの調査でも、霧のために移動や写真撮影に支障を来すというトラブルに見舞われた。その反面、文献研究は進んだが、現在執筆しているビザンツ境界域（特にタルスースの歴史）に関する概説書だけでなく、アカデミックな論考の執筆も可能なレベルとなったので現在執筆を計画している。

最後に今後の展望をまとめておきたい。イスラームとキリスト教の境界域の歴史という研究テーマを進める上には、やはり本格的なレバノンにおける現地調査が必要と考えている。また、できればイベリア半島において両者の境界域となっていた地域を実地検分してみたい。その上で、ビザンツ境界域を「辺境」として捉えがちな中央からの視点に偏った文献資料を再検討し、それらの記述を否定するのではなく、新たな面から利用するという姿勢で、ビザンツ境界域の歴史を研究し、さらに叙述していきたい。

¹シリアとイラク北部とそこに隣接するアナトリア半島東南部を包括した地域で、イスラーム勢力（カリフ政権及びその衰退後に成立したムスリム諸王朝）とビザンツ帝国との境界域。ムスリムの学者は2重構造をなすと認識していた。アナトリア半島東南部の旧キリキア地方からタウロス・アマノス山麓一帯をスグール al-Thughur（或いはその単数形のサグル）と国境地域を称し、その内側をアワシム al-‘Awasiim と区分した。スグールはさらに西部のシリアのスグールと東部のジャジーラのスグ

ールに分けられた。

ⁱⁱ 例えば、ボンナーによる一連の境界域に参集した「信仰の戦士」に関する研究が知られている。Bonner, Michael, *Aristocratic Violence and Holy War, Studies in the Jihad and the Arab-Byzantine Frontier*, New Haven, 1996; idem, Some Observations Concerning the Early Development of Jihad on the Arab-Byzantine Frontier, *Studia Islamica* 75(1992), 5-31etc. また、研究代表者は、現在一般読者向けの概説書ではあるが、タルスースを中心とした境界域社会に関する書物を執筆中である（刀水書房『世界史の鏡』シリーズの一書として刊行予定）。

ⁱⁱⁱ 近年の邦文の論文としては、中村妙子「12世紀前半シリア諸都市と初期十字軍の交渉：協定とジハードからみた政治」『史学雑誌』109/12(2000), 1-34等が見られる。

^{iv} 451年のカルケドン公会議で採択されたカルケドン信条に反対して独自の宗派をなした諸教会の中で、アンティオキア総主教座において分離独立した教会。彼等自身は単性論と呼ばれることを拒否し、シリア・オーソドクス教会（正教会）と称する。

^v アナザルバスは、平地の都市とその荒廃に位置する山岳要塞の複合構造をなしているが、都市遺跡自体はローマ・ビザンツ時代のものである。

^{vi} アレッポ及びアンティオキアからアパメア（現アフアーミーヤ）に向かう街道。

^{vii} ハーリムはアレッポから39km、アンタキアから21kmに位置する国境の都市で、ビザンツ時代に小規模な要塞が建設されていたことが分かっている。その後ムスリムの支配下におかれたが、1098年に十字軍に占領され、アンティオキア公国の防衛のための堅固な要塞として再建された。1164年にアレッポのザンギー朝の君主ヌール・アッディーンによって再征服され、再びムスリムの支配領域に組み入れられた。

^{viii} ちなみに、サラディンの要塞は非常に峻厳な山岳部に位置する要塞であり、周囲にオリーブ栽培は見られない。

^{ix} レバノンを中心に信者を擁する東方諸教会の1つ。十字軍の時代にローマ教皇庁の權威を認め、カトリック教会に属したが、独自の典礼の伝統を維持している。

^x 11世紀にシーア派のイスマール派から分かれた宗派で、現在信徒はレバノン、シリア、イスラエルに約100万人が居住しているといわれる。19世紀前半からマロン派との紛争が激化し、1925年にはフランスの委任統治に対する大規模な反乱を起こした。現代レバノンの宗派体制の下で大きな政治勢力をなしている。